

「こんなときどうする?」

はちに刺されたとき

夏の終わりから秋にかけて、ハチの巣が大きくなり、ハチの攻撃性も高まる季節に入ります。日本では毎年20人前後がハチに刺されて死に至っていることをご存知でしょうか?

ハチ刺されによる死のほとんどは、アナフィラキシーショックと呼ばれる即時型のアレルギー反応が原因です。ハチに刺された場合、ハチアレルギーがない人は刺された部位に痛みやかゆみ、腫れなどが見られ、数日で消えます。しかし、ハチアレルギーがある人では30分以内にアレルギー症状が出て、重症なほどその出現は早いと言われています。

それでは、ハチに刺されてしまったら、どうしたらよいのでしょうか。刺されたら、まず安全な場所に移動して、刺された傷口を流水でよく洗い流し冷やします。ハチの針が残って

いる場合は、そっと抜きましよう。ただし、針を逆に奥に押し込んでしまうこともありますので、無理に取り除かないようにしましょう。30分ほど安静にして様子を見て、体調に変化がないようでしたら、ひとまず安心です。途中で全身のかゆみやじんましん、全身の紅潮、息苦しきや吐き気・嘔吐などの症状が出た場合は、なるべく早く医療機関に搬送して治療を受ける必要があります。重症なほど症状が悪化する時間が早いので、迅速な対応が求められます。過去にハチに刺されたかどうかとは関係なく、初めて刺された場合でも、このような全身のアレルギー反応が起こることもまれにありますので、「ハチに刺されたことがないから大丈夫!」と油断せずに、しっかり対応したいものです。

アドレナリン自己注射薬は、ハチアレルギーなどのある人にアナフィラキシー症状が出た

場合、自身で迅速に対応できるように作られた薬です。緊急時には、服の上からでも太ももの外側に注射できます。過去にハチ刺されによるアナフィラキシー症状を起こしたことのある人は登録医師の処方により携帯することができます。

最後に、当然のことですがハチに刺されないことが最善の予防です。日常生活でも洗濯物を取りこむときなど、ハチを紛れ込ませないよう注意が必要です。野外のレジャーや農作業のときも、巣に近づかない、長袖の服を着る(黒い服は避ける)などの予防策をとりましよう。ハチを見かけても、物で振り払うなどの刺激をせずに、いなくなるまで顔を下向きにして体を低くして待ちましよう。

新潟県立看護大学

臨床看護学領域

成人看護学

教授 高柳智子